

## 先端基礎研究センターで1年を過ごして

ウラン化合物超伝導研究グループ 山本悦嗣

私は昨年4月に原研に新入職員として入所した。入所時には自分が入る予定の部署（研究グループ）名しか知らず、またその部署も大学院時代と全く異なる分野であったため、具体的にはどういったことをやるのか全く知らないという多少の不安を抱いたまま、2週間の研修期間は過ぎていった。さて研修が終わり先端基礎研究センターに配属されてみると、私の属する研究グループは客員部門であるため直接の上司（グループリーダー）が原研の職員でなく、また研究グループの本務の職員が自分以外いないということを知り非常に驚いた。新入りの若輩者一人で果たしてうまくいくものだろうかと不安に思ったことを覚えている。さらに悪いことには予算が国会を通過していなかったため、研究グループ自体が正式には認められておらず、若干肩身のせまいような思いもした。（研究グループの正式発足は6月末。）

配属されてすぐ、実際に原研で扱う予定の装置の操作法を修得するために、グループリーダーが当時、併任教授をしていた筑波大学へ見習いに行くことになった。この時、東海から筑波まで電車、バスを乗り継いでいくと2時間以上かかるため、毎日東海から筑波まで通うわけにいかない。そこで月曜に東海を出発し、金曜もしくは土曜まで筑波に滞在して週末に東海に帰るといふ、二重生活を送る羽目になったわけである。この見習いは8月の初めまで続き、おかげで原研に慣れるのに他の人より長くかかってしまった。

原研での最初の仕事は核燃料使用許可変更の科技厅への申請であった。私の研究グループでは試料の原料として天然ウランを使用するため、科技厅の許可を得る必要がある。そこで当時の萩原次長や他の方々から教を請い、保安管理室の方から何回か手直しを受け、四苦八苦して原稿を仕上げた。この原稿は10月に科技厅へ提出し、本年2月に許可が下り、ようやくウ

ランが使用できるようになった。その他、装置や物品の購入や研究室の整備などでほとんど研究はしないまま、入所後の1年間に過ぎていった。

私は原研の他の部署のことはほとんど知らないで、先端基礎研究センターが原研の他の部署と比べてどういった特色を持っているのかは知らない。そこで自分が感じた研究機関として大学と原研の違いを2、3挙げてみようと思う。まず一番戸惑いを感じたのは、機器や物品の購入である。原研では各研究グループが個別に業者と取引するのではなく、調達課という部署がいっさいの契約を行い、器材課という部署の検収を受けてようやく納入されるのである。また原研は準公的機関である特殊法人であるため、競争契約が原則で業者を指定して発注することが困難であり、物品購入においては、どの業者が落札してもこちらの必要条件を満たすように仕様書を作成しなければならない。次に大学との違いでやはり感じるのは、研究に携わる人員の少なさである。原研でも特別研究生などの形で学生がいるが、研究者のほとんどは職員であるため、多くの若い院生がメインで動く大学とはマンパワーの面でかなり差がある。

入所後1年が経過した現在、新入所員1名と専門研究員1名が新たに加わり、装置その他もようやく一通りそろって、何とか研究室らしい格好になってきたところである。私としては、今後とも自分なりに研究を続けていきたいと思う。